

水のことわざを学ぶ



よしむら かずなり
吉村 和就

(グローバルウォーター・ジャパン 代表)
国連テクニカルアドバイザー

瑞穂（みずほ）の国、この表現は日本書記が書かれて以来、日本国の美称として使われている。その意味するところは、神意により水が豊富で、稲が豊かに実り、その結果栄える国を象徴している。今でこそ日本国民は水に不自由していないが、日本で初めて近代水道（配管内を圧力をかけて殺菌された水を送る）が開始されたのは明治二十年（一八八七年）横浜水道であり、つい百二十七年前のことである。紀元前三世紀の弥生時代から農耕稲作民族の日本人は水の恵みに感謝し、また水の恐ろしさを噛みしめてきた長い歴史を有している。それがゆえに、日本は世界でも水に関する諺が多い国である。今回は日本人の思想や考え方に大きな影響を与えてきた「水に関することわざ」から人生への教訓や、今後の生き方を学んでみたい。

まずは中国の思想家から、日本人が学んだことわざ及び熟語をみてみよう。

一、中国から学んだ、ことわざ・名言

・「上善如水」あまりにも有名な言葉である。「老子の八章」に書かれたもので、「上善は水の如し」、上善とは、「最も理想的な生き方を願うならば、水の在り方に学べ」ということである。水には学ぶに足る三つの特徴がある。第一に、柔軟である。四角な器に入れば四角になり、丸

い器に入れば丸くなる、どんなに器を変えてもそれなりに形を変え、逆らうことがない。第二に、水は低いところ、低いところに流れてゆく。しかもその間に多くの植物や生態系に分け隔てなく自分（水）を与えながら、低いところを求めて移動している。低いところに身を置くのは人間、誰でも嫌がるが、水は最も低いところに留まり、しかも謙虚である。第三に、ものすごい能力を秘めているが、自分の能力や地位を誇ろうともしない。急流は岩を砕いて破壊し、逆に水の一滴は百年で岩をも穿つ能力を持っている。このように水は「柔軟、謙虚、秘めたるエネルギー」を有している。

老子は、人間もそれらを身につけることが出来れば、理想の生き方に近づけるのだという。最高の善とは無為になすものであり、「俺は善をおこなっているんだ」という意識を持つこと無く、自然のままの行いが即ち「善」である。「如水」単独では、流れる水の如くすら物事が運ぶ様や、流れに逆らわずに素直に従うという意味でもよく傳われている。

・「君子交淡若水、小人之交若醴」
「莊子の山水編」に書かれたもので、「君子の交わりは淡きこと水の若（ごと）し、小人の交わりは甘きこと醴（れい）の若し」すなわち君子（知徳の優れた人）の交際は、水のようにあっさりしているが、小人（つまらぬ人間）の交わりは醴（甘酒）のようにベタベタしている。ベタベタした交わりは、すぐに飽きが来て長続きしない。またくつつくのも早い、別れるのも早い。その点、水のように淡々とした交わりはいつまでも飽きが来ないので長続きする。良好な人間関係を築こうとするなら、君子の交わりを心がけよという教訓である。

・「人莫鑑於流水、而鑑於止水」
「莊子の徳充府編」に書かれたもので、「人は流水に鑑みることなくして、止水に鑑みる」、これは流れる水には人の姿を映し出すことが出来ないが、静止（止水）した水は澄みきっているので、あるがままの姿を映し出すことができる。人間も静止した水のように、静かな澄み切った心境であれば、いついかなる事態になっても、慌てることなく、誤りのない判断を下すことができるのだという教えである。ここから澄み切った心境を形容する

「明鏡止水」という言葉が生まれた。澄み切った心は、無心の境地とも言える。なにごとでも雑念や欲望、野心が心に詰まっていれば、それに足を掬われ、流動する情勢への対応を誤ってしまふ、誰でも勝とうとする気持ちに先を立てば、普段の実力を発揮できず、敗退してしまふ。忙しい世の中になればなるほど「明鏡止水」の心境を持ち続けることが肝要であると教えている。

「越後の虎」と恐れられていた上杉謙信は、合戦の天才と言えらるほど戦いの腕を持っていたが、「明鏡止水」のことわざを多用している。謙信の名言集には「人の上に立つ人間の一言は、深き思慮を持ってなすべきだ。軽率なことは言ってはならぬ。」と心の在り方を述べている。謙信曰く。

——心に物なき時は、心広く体安らかなり ——心に邪見なき時は、人を育てる
 ——心に自慢なき時は、人の善を知る ——心に誤りなき時は、人を恐れず
 ——心に曇りなき時は、言葉知らかなり

・「智猶水也、不流則腐」 「宋名臣の言行録」に書かれたもので、「智は猶（なお）水なり、流れざる時は則（すなわち）腐る」智力は水のようなもので、水は流れないときには腐るものだ。すなわち智力も使わなければ、水と同じように腐ってしまうことを意味している。

・「氷凍三尺、並非一日之寒」 「三尺の水が凍るのは、一日の寒さにあらず」川の水が凍ることは、決して一日の寒さだけではない。このことから一つのことが出来ることは容易ではなく、長い間の積み重ねが必要だという喩である。また、悪い事柄についても、長い間の正しくない行いの積み重ねによって起きたのだという時にも使われる。

・「水之積也不厚、則其負大舟也無力」 「莊子」の言葉で「水の積む厚みがなければ、すなわち其の大舟を負う力なし」水の溜まり方が深くないと、そこに大きな舟を浮かべることが出来ない。つまり大きな事を成功させるためには、多くの積み重ねの努力が必要であることを示唆している。

・「一水四見」 「撰大乘論」に述べられている言葉で、同じ水の流れてあっても、見る者の立場によって、その見方がガラリと変わる喩である。魚は川の流れて自己の居場所と考え、人間は飲

料や沐浴すべき水の流れと考え、神々は万物に命を与える流れる水と考えている。では我々現代人は川の流れてどう考えているだろうか。唄にあるように「川の流れ」を人生そのものに見ている人や、川の流れこそ美しい風景を作り出す源と見ている人、さらには川を見て、雨水を海に送り出す水路だと見ている人など様々であろう。

二、水に関する諺・名言

我々の身の回りには、水に関する言葉が数多く存在する。ものごとを説明したり、判断する時には、水を用いた表現が最も適しているであろうか。以下は我々の日常会話や文章でよく使われる「水のことわざ表現」である。意味については、多くの読者は既に理解済みと思われるので割愛する。

・自然を表す表現

山紫水明 —— 行雲流水 —— 明鏡止水 —— 一衣帯水

・状態や行動、心がけを示す。

背水の陣 —— 水を漏らさぬ体制で —— 我田引水 —— 上手の手から水が漏る
 水に絵を描く —— 蛙の面に水 —— 河童の河流れ —— 血は水よりも濃い
 水は血よりも薄い —— 覆水盆に返らず —— 年寄りの冷や水 —— 焼け石に水
 立て板に水 —— 水を打ったように —— 湯水のように使う —— 寝耳に水
 水と油 —— 水火も辞せず —— 水火の争い —— 水に流す —— 水が合わない
 水入り —— 水掛け論 —— 水の泡 —— 水を得た魚のように —— 水心あれば、魚心
 魚心あれば、水心 —— 魚の眼に水見えず —— 水魚の交わり —— 水清ければ魚棲まず
 水広ければ魚大なり —— 水を向ける —— 水を差す —— 刀で水を切る
 湯水のように —— 水臭い —— 呼び水 —— 水に慣れる —— 古川に水絶えず
 智者は水を楽しむ

三、外国の「水のことわざ表現」

- ナイルの水を飲むものは、ナイルに帰る (エジプト)
- 水車小屋の主人が、気が付かない水が水車の傍を流れる (イギリス)
- 知らない間に、失われるモノが沢山ある例え
- 水の中で、棒を振り回す (フランス) 無駄な努力の例え
- 川へ水を運ぶ (フランス) 労力を使うだけ、なにも効果のないこと
- ワインに水を差す (フランス) 余計な事をする
- コップ一杯の水の中で溺れる (フランス) ほんの些細なことでもへこたれること
- 争いの初めは、堤より水を漏らすに似たり (旧約聖書)
- 破滅に至る大きな争いも、きっかけは、ごく小さいことから始まる
- 先に行く者は、濁り水を飲まずに済む (ケニア・タンザニア)
- 早く着いた馬は、良い水にありつける (ナイジェリア)
- 先に行く者は、澄んだ水を飲める (ブラジル)
- 水と火、器を一つにせず (ポルトガル)
- まったく相容れないもの同士は、同じ場所 (器) に入れてはならない
- 水と火は、よい召使だが、悪い主人でもある (英国、フランス、ドイツなど共通)
- 人間が使いこなしている間は極めて便利だが、制御できなくなると恐ろしい
- 火と水は小さいうちは味方だが、大きくなると敵になる (マレーシア)
- 火と水と政府は、情けを知らない (アルバニア)
- 火打石から、水を取り出す (イギリス) 至難の業を成し遂げること
- 水があれば、砂で清めることはない (アラブ)
- 男が川なら、女は水たまり (アラブ)

- みんなが讚えるからには、水には何かがあるのだろう (フランス)
- 雨が降るなら、雲があつたはず (アラブ)
- 雨が降れば、必ず土砂降り (イギリス) 悪いことは重なる
- 眠った水より、悪い水はない (フランス) 黙っている者ほど、油断のならぬ者はない
- 水は山へは登らない (ドイツ) 世論に逆らつてはいけない
- 雪の多い年は、豊作である (イギリス、フランス、ドイツ、ロシア)
- 夏の穀物の丈は、冬の雪の深さ次第 (クロアチア)
- 海は、どんな川の流れも拒まない (イギリス) 清濁併せ飲むと同意語

四、「じつむね」のじつむね

世界でも水に関することわざで、人生訓や物事への考え方が多く語られていることが多い。最

- 後は「ことわざ」の「ことわざ」で締め繰り返したい。
- ことわざは、言いたい事を言ってくれる (スウェーデン)
- ことわざは、言葉の明かりである (アラブ)
- ことわざは街路の知恵である (ドイツ)
- 二重の意味を持たない、ことわざはない (ケニア)
- 愚か者に、ことわざを使うと意味を説明しなくてはならない (ガーナ)

参考図書・文献

- ・ 故事ことわざ大辞典 (小学館)
- ・ 故事ことわざ辞典 (創拓社)
- ・ 中国名言読本 (講談社)
- ・ 岩波ことわざ辞典 (岩波書店)
- ・ ドイツことわざ辞典 (白水社)
- ・ フランスことわざ辞典 (白水社)
- ・ 中国古典一日一言 (PHP文庫)
- ・ 楽水、中川勝著 (東京図書出版会)